# Commentariolum Etymologicum

## ——英語に回帰したゲルマン系の語詞——

永　野　芳　郎

インド・ヨーロッパ語族（以下「印欧語族」と略記）に属し，ヨーロッパ地域に行われる諸言語を語派別にまとめると，およそバルト・スラヴ，ゲルマン，ロマン，ケルトとなる。そのうち第2，第3の二つが直接この論考に関係する。すなわちゲルマン語特有の語詞のあるものがロマン語圏に借入され，そこでロマン語的な修飾と改変をこうむり，さらに再びもとのゲルマン語圏に借入されるという現象——これを「回帰」(retour) と呼ぶことにする。つまり，この小論の意図は隣接する二つ（あるいは時としてそれ以上）の言語または語派が接觸するときに起りうる，語詞の比較的特殊な貸借の結果を「回帰」という形でとらえようとしたことである。従来，史的言語学ではこうした形での語の借用の考察は，折にふれて注意される程度のものであって，まとまった研究は行われていないと云えよう。筆者の蒐集したその種の英語借入語の数は，ほぼ150になるけれども，ここでは多少の例外はあるものの，比較的使用度の高いもの50語に限定して，各々のたどった変化のあとを観察することにした。その場合，印欧比較言語学の成果をできるだけ簡明に織りこむことによって，各語の同系性を巾広く証明しようと試みた。

一般的に云えば，借用 (borrowing) は二つの民族間の征服や友交関係が大きな原動力となって，文化の高い側からそうでない側へ，また新しい概念や事物が伝達されるとき生じる言語現象である。この意味では，借用は言語文化史を成立させる諸要素の中でも，もっとも重要なものの一つなのである。この論考

が直接かかわるゲルマン，ロマン両民族の舞台となった時代的背景は，（西）ローマ帝国の分裂崩壊（5世紀終り）前後から近世にかけてのおよそ10数世紀間である。

さて，古代のゲルマン民族が多数の部族国家からなり立っていたことは，ローマの史家タキトゥスの『ゲルマーニア』(*Germania*) が伝えるところである。これはこの民族がケルト，イリュリアなどの先住民族を圧迫南下して，ローマ帝国と接觸するようになった紀元後1世紀あたりのことである。言語的に見ると，東ゲルマン語群（ヴァンダル，ブルグンド，東西両ゴートの諸語），西ゲルマン語群（アングル，サクソン，アレマン，フランクの諸語），北ゲルマン語群（デンマーク，ノルウェー，スウェーデンの諸語）の三つに大別される。

しかし375年にフン族（アジア系遊牧騎馬民族）の西進に押されて，いわゆる「ゲルマン民族大移動」がはじまった。その結果，東ゲルマン語の民族が移動し，中でも西ゴート族が王国（415頃～711）を築いたのはイベリア半島であった。次に西ゲルマン人はブリタンニアそして特にガリアを自らの新天地形成の中心とした。なお北ゲルマン人の各地への移動は9世紀以降であった。

このような結果，当然問題となるのはそれらの地域の，推定される言語情勢である。まずイベリア半島に関しては，『スペイン語のゲルマン語要素は，信じられるところでは，半島における西ゴート族の支配から概して生じたものではないように見える。侵入者の数は大きな影響を与えるには比較的少なかった。……一般的に云えることは，スペイン語がとり入れた僅か100そこそこのゲルマン語詞は，大部分西ゴート族の支配より古く導入されたものである。つまりローマ帝国の分裂に先立って，それらは俗ラテン語に融合してしまった。そしてそのために，スペイン語のみならずまた他のすべてのロマン諸語の中に我々はそれらを見出すのである。』《Parece que los elementos germánicos del español *no proceden, en general*, de la dominación visigoda en la Península, como pudiera creerse: el número de los invasores era relativamente escaso para

influir mucho; . . . En general, puede decirse que el centenar escaso de palabras germánicas que emplea el español es, en gran parte, de introducción más antigua que la dominación visigoda; se incorporaron al latín vulgar antes de la desmembración del Imperio, y por eso las vemos no soló en el español, sino en todos los otros romances.》—R. Menéndez Pidal, *Manual de Gramática Histórica Española*, pp. 19～20. 他方ガリア地方では情勢は初期と後期とでは異なっていたと云える。5世紀末，クロヴィスが全域を支配するフランク王国（メロヴィング朝）を築いた当初は，北部地方は完全にゲルマン語化されたけれども，彼自身カトリック教徒となって以降は，フランク族の言語は次第にロマン語に道をゆずるようになり，その後のフランス語の形成に直接参与することなく，主に人名，地名や語彙に往時の存在の影を落すのみとなった。他のロマン語域についても，ほぼ同じことが云えるであろう。『全体的に見れば，ロマン語の言語的実体に対するゲルマン民族の影響は驚くほど僅少である——動員されたゲルマン人の兵力と多様性，そしてゲルマン人によって終結にみちびかれたローマ帝国の政治的，軍事的破局の規模と，その影響とを比較するならばである』"Im ganzen gesehen ist der Einfluss der Germanen auf die sprachliche Substanz des Romanischen erstaunlich gering, wenn man ihn zur Stärke und Vielfalt der germanischen Menschenaufgebots und zum Ausmass der durch die Germanen vollendeten politisch-militärischen Katastrophe des Imperium Romanum in Vergleich stellt." —H. Lausberg, *Romanische Sprachwissenschaft*, I, s. 44. ゲルマン語がこのようにして全面的にロマン語の前に屈した最大の理由は，何といっても後者がラテン文化の媒体として，ほとんど絶対的な強さを有していたからである。

ゲルマン語詞借入の個々の動機は何であれ，ロマン語はそれを次第に同化して行った。その同化がほとんど完成したときに起きたのが，「ノルマン人の英国征服」(The Norman Conquest: 1066年) であった。これをきっかけとして，

他の生粋のロマン語と共に，英語語彙の一部となったその種のものは数少くない。起源的には英語と同系の他のゲルマン語方言から出発したにもかかわらず，それらはいわばロマン語の洗礼をうけ，文化的威信を身につけて入来したと云えるのである。

下記に用いた略語は——

＊＝再構形に附されたしるし

古＝古期，中＝中期

低＝低地，高＝高地

西＝スペイン語，伊＝イタリア語

ポルト＝ポルトガル語

ノルド＝共通語時代（10世紀まで）の北ゲルマン諸語

1) **ambassador** 14世紀の間に借入された中英の語形は ambass(i)atour, embassatour, —dour など様々である。他方，借用のもととなった（古）仏 ambassadeur（プロヴァンス方言 ambaissador）は古西 ambaxador (-x- は [x] の音。現 ambajador) と共に，伊 ambasciatore からさらに借入されたもの。この段階で措定される（中期）ラテン形は *ambactiātōrem，動詞形は *ambactiāre「使いに行く」である。そして16世紀の英語に借用された **embassy** の源となるロマン語の諸形が，上記のものの基となっていることがわかる。この語の来源であるロマン語諸形は古仏 ambassée, —axée（プロヴァンス ambaissada），古西 ambaxada，伊 ambasciata であって，文証される中ラテン形は ambactia, ambaxia「使い」，そしてその動作主名詞は ambactus「使いの者；臣下」である。

さて，他方ゲルマン語圏には，同じく「使いの者」を意味する同系語として，古くはゴート andbahts，古英 ambeht，古高独 ambaht（＞現独 amt「役職」），

古ノルド embætti などが存在した。上掲のラテン ambactus がこれらのゲルマン諸形と音韻的にも対応（特にラテン c [k]＝ゲルマン h [χ]）するところから，全体的な起源はゲルマン語系ではないかと一応は考えられうる。しかし，この考え方を動揺させるような文献に，我々の注意がひかれることになる。すなわち，ローマ帝国の戦略に関するカェサル (Gaius Julius Caesar 前100–44) の『ガリア戦記』(*De Bello Gallico*, vi, 15) にある一文である：“Ambactus apud Ennium lingua Gallica servus appellatur”「ambactus とはエンニウスによれば，ガリアの言語では召使いの呼称なり」と（エンニウスはローマの大詩人）。

上記『ガリア戦記』（全８巻）の成立が紀元前58年にはじまって，史的信頼性の高いこと，次に古代ローマ時代にガリア人と呼ばれていたケルト民族は，すでにゲルマン民族侵入以前の前7～4世紀に，西ヨーロッパ全土を支配した独自の文化の担い手であったこと，最後にゲルマン語派で最古の文献（ウルフィラ訳聖書の断片）を有するゴート語でさえも，紀元後４世紀あたりのものでしかないこと――これら諸点の考量結果は，今問題の語の起源がケルト語に存する旨を，明確に示唆することになろう。たとえば，ウェールズ語 amaeth「農夫，農奴」にその面影を伝えることになる，上のラテン語から再構可能な原ケルト *ambactus は *amb(i)-「まわって」＋*ag-「追いたてる」(→ラテン agere, 過去分詞 actus) と分析できる。つまり，「追い立てまわされる者」の原義はその後文化の時間，空間の変動を通過して，現在の意味に変ったことになる。意味論の面からすれば，「意味の向上」の一例である。以上のことがらを，借用の回帰として整理してみると，ケルト→ロマン→ゲルマン→ロマン→ゲルマン（英）という図式になるであろう。ただし，この場合ケルト語は原点に復帰するだけの力を遂にもたないのである。

2) **array** 13世紀に登場したアングロ・ノルマン語形 arai は「衣装」を主に意味したが，その後は「隊列，配置」といった軍事用語となる。古仏 arei

(>現 arroi)をはじめとして，プロヴァンス方言 arrei，伊 arredo などの名詞形は古仏 areer，プロヴァンス arezar，伊 arredare などからの「逆成」(back-formation) である。これらから措定されうる共通ロマン語形は *arrēdāre「整える」である。この語形は分析すれば，ロマン（ラテン）接頭辞 ar-<ad-＋ゲルマン語基 *raid-「整った，支度できた」＋-are（ロマン動詞接尾辞）の諸要素から成り立っていることがわかるが，意味の重心は何といっても，そのゲルマン語基にある。ここに見られる共通ゲルマン語形は，古英 (ge)ræde (>中英 irede >現英 ready)，中高独 gereit（→現 bereit），古ノルド reiðr，ゴート garaiþs などのように「用意のできた」という共通の意味を有しつつ，個別的な発現の仕方をとる。要するに，array はロマン，ゲルマン双方の混成語 (hybrid) 起源なのである。

ところで，英語には curry favor「（人の）きげんをとる」という慣用句があるけれども，この動詞 **curry**「（馬に）櫛をかける」（13世紀借入）；「（なめし皮を）作る」（15世紀）の起源をたどってみよう。古仏 correier，プロヴァンス conrear，西 correar，伊 corredare など，基本的にはすべて「整える，準備する」を意味する。そしてこれらから求められる共通ロマン語形は *con-rēdāre である。一見すればすぐ気づくように，array の祖形とは接頭辞が異なるにすぎない。共通ゲルマン語形 *garædjan＝*ga-（強意の接頭辞）＋*raid-「支度できた」＋-jan（作為動詞接尾辞）をそっくりそのままモデルにして作られたのが *con-rēd-āre なのである。語詞の借用に際しては，この種の「敷き写し」（フランス語で calque）は意外に数多いのである。この第2項でとりあげた二語に関する限り，ゲルマン語とロマン語の交流を促した文化的条件は，少くとも同じ水準にあったのではないかと思われる。なおこの項の回帰のモデルはゲルマン→ロマン→ゲルマン（英）。

3) **balcony** 17世紀にイタリア語の balcone を借入したもの。仏 balcon，西

balcón，ポルト balcão もまたそうである。もとの伊 balcone における -one は周知のように，「拡大，大」を意味する接尾辞（例：libro「本」～librone「大きな本」）であるから，問題になる部分はそれを除去した balco，あるいは現用の palco「床，床板，足場」である。そしてこれ自体がゲルマン語からの借用であることが判明する。すなわち，古高独 balcho または palcho（>現独 balken)，古英 balc（>現 balk)，古ノルド bjalki（>スウェーデン biælke，デンマーク bjelke)などはすべて「角材，はり板」の義であって，これによって再構される共通語形は *balkon「板材」となる。さらに，この意味を有する語形はゲルマン語域を超えて，印欧語族の他の語派に対しても求めることができるであろう。基通印欧語形 *bhelg- の具体的発現として，たとえばギリシア phálagx (—gx=nx)「(古代の）方陣軍勢；指（または趾）骨」は原義「角材」のかなり比喩化されたものであり，ラテン fulcire「支える」，fulcimen「支え」，fulcrum「台架」は未だ具象的な意味を残す（後者は *bhelg- の母音度 (vowel grade) ゼロに接尾つきの *bhlk-yo- から構成されたもの)。印欧語比較研究の成果によって，この程度の関係づけは学問的には標準ともなっているけれども，少なくとも balcony と balk との間には，今ではもう超えられない断絶ができてしまっているのである。回帰のパターンは前項に準じる（以下の項では，同じパターンの場合に附言を省く)。

4) **banish** 14世紀に古仏動詞（不定詞）banir「追放する」の現在語幹 baniss- は中英以降で banish として受け入れられた。abolish, finish なども同様の扱いによってできた語形である。同義の伊 bandire などと共に再構される，通俗ラテンないしは共通ロマン語形は *bannīre とされ，語幹部がゲルマン要素の *bann- である。古英 gebann（>現英 ban)，古高独 pan, ban，古ノルド bann などとして文証されるもので，「有罪を公言する，兵士を召集する，追放を宣言する」などといった封建時代の習わしをあらわした語である。上掲の伊

bandire の過去分詞形から，名詞に転用されるようになった bandito「禁止された者」は「盗賊」の義である（なお現英 bandit は仏語系）。ところで，「禁令」とか「追放」とかいった古い封建社会の概念を負わされているのがゲルマン語要素 *bann- ではあるが，我々は更に進んで，その根源的な印欧語の概念に及ぶ必要があろうかと思う。ここにおいて対応する再構形 *bha- に附せられる意味は「言う，告げる」で，ラテン fārī，ギリシア phánai にその規則的な再現を見出し，ギリシア phónē「音」もまた異形にすぎない。このことから，ゲルマン語はその語根に対して「罪を公言する」という意味的制限を加えたこともわかるのである。

5) **bank** 仏 banque が15世紀に借入。この原義の「ベンチ，テーブル，カウンター」が伊，西 banco の語形に保たれ，意味の特殊化した「両替商人のテーブル，カウンター」→「銀行」が同じ両言語で，banca として分化していることは周知のとおりである。ところで，こうしたロマン語の来源はゲルマン語 *bankon「土手(のように長く盛り上ったもの)」で，古ノルド bakki（スウェーデン backe，デンマーク bakke「丘」），古英 banca などのように再現される。この形態と意味が起点となって，二次的に比喩の作用を介して，構成されたのが *bankiz であった。-iz（i 語幹という）は語幹母音の音色を /a → æ → e/ と変える（母音変異：ドイツ語でウムラウト）と同時に，子音 /k/ を口蓋化することによって，古英にはすでに benċ (ċ は [tʃ] の音) の形が存在した（>現英 bench)。「ベンチ」の原義は「土手のように長く盛り上った腰掛け」である。「土手」～「腰掛，ベンチ」～「銀行」の意味的なつながりは，今では話し手の意識の彼方に消え去ってしまっている。

6) **bargain** 14世紀に古仏 bargaignier「値切る；躊躇する」（後者の意味は現仏 barguigner に保存）が借用されたもの。プロヴァンス barganhar，伊（古）

bargagnare の諸形を経て，中ラテン barcaniāre にまでさかのぼると，こうした形はゲルマン語要素をふくむことがわかる。すなわち *borganjan＜*borgan であって，古高独 borgēn「いたわる」を経て現独（同形）「掛けでやりとりする；借りる」，あるいは古英 borgian「信用借りをする」（＞現英 borrow「借りる」)となって再現している。さて，この語の源は共通ゲルマン *bhergh- である。原義は「かくす；守る」とされ，特に「自己の利益を守る，いたわる」という行為が「貸借する，値切る」という意味の変化を招いたことは十分に明らかである。さらに，この「守る」の観念は「人民を守る」ために築かれた，古代ゲルマンの都市をあらわす語，英 borough（＜古英 burg, burh），独 burg などの核心となっている。上に原義として掲げた「守る」はまた「かくす」とは決して異質の行為ではない。母音度ゼロの形 *bhrgh- は *burgjan を経て，古英 byrgan となり現英 bury「埋める」を生じたことを最後に附記しておこう。

7) **belfrey** 「鐘楼」 中期英語で最初借用されたときの語形は berfrey である。来源は下に記すように，ゲルマン語から借用された古仏 berfrei である。他方，古仏には belfrei という語形も存在したが，これもゲルマン語由来の中期ラテン belfredus からの借用である。このラテン語形で注意すべきことは，*berfredus として受け入れるべきところ，この語にふくまれる近接した二箇の音素 /r/ のうち最初のものが /l/ に「異化」(dissimilation) を起している点である。異化の原因はひとえに発音の恣意性に帰せられるのであって，上の中期ラテンと古仏の両形も，それによってもとのゲルマン語形の意味するところとは，差が生じたとは云えない。

さて，来源として措定される形は *bergfrið-（＞古高独 bergfrid など）で，一見して明らかに複合語である——*bergan（＜*bhergh-「守る」（＞古英 beorgan，古高独 bergan）＋*friþuz「平和」。つまり，この意味は「(敵の襲来から守る）見張り塔」であった。このような軍事施設は英国征服（1066年）当

時のノルマン・フランス軍にすでに存在したと考えられる。しかし15世紀に伝わった仏語の別形 belfrei に対しては，庶民の通俗語源解釈 (folk etymology) が働くことになった。bel- の部分は bell の連想を呼び起したのである。その後は 'bell-tower' の意味に接近したのである。

8) **blank** 15世紀に仏語の blanc の借用。同系のプロヴァンス blanc，西 blanco, ポルト branco, 伊 bianco などを基にするロマン語祖形は *blancus である。これは転じてゲルマン *blankaz からの借用であって，古高独 blanc「白い，輝く」として文証される。しかし，その他の古いゲルマン諸語では，この色彩語はしばしば転用されて，たとえば古英 blanca は「馬」を，古ノルド blakkr は「青白い；馬」をそれぞれ意味していた。「馬」の場合は勿論「白馬」のことを指す。ロマン諸語がわざわざゲルマン語から，「白」を意味する語を借入したのは，そうした語を所有しなかったからではない。ロマン諸語の祖語であるラテン語には，albus 「白い」が確実に存在したのである。しかしながら，敢えてゲルマン系の語を借入した理由は何であろうか。同じ「白色」をあらわすにも，ラテン語本来のものは，どちらかと云えば「灰白色，蒼白」であったのに対し，ゲルマン系のものは「輝くような白色」のニュアンスを有していたからである。ゲルマン語 *blankaz はさかのぼれば，共通印欧語 *bhel-「光り輝く；燃える」に発するのである。序いでながら，この語根の「燃える」の意味から，ゲルマン語には *blakaz「燃えた」が構成され，これは古英に blæc「黒い」という色彩語をもたらした。現英 black はその結果である。したがって，意味的に全く正反対の blank と black とが遠くは印欧基語の同一語根から派出した，いわば二重語 (doublet) であるのはまことに奇異である。

9) **blond** 15世紀に仏 blond を借入したもの。伊 biondo，西 blondo などの形を生じたもとの形は中期ラテン blondus, blundus であって，ゲルマン語から

の借用であるとされる。おそらくゲルマン民族に特徴的な，頭髪の黄金色をあらわす語であっただろう。ただし文証されてはいないが，たとえば古英には複合語として，blanden-feax, blonden-feax が見出される――“þær wearo Ongenðiow ecgum sweorda, *blonden-fexa* on bid wrecen.”「そこで白髪のオンゲンシーオウは剣の刃によって窮地に落し入れられた」(*Beowulf*, 2962)。この場合一応は「白髪の」と訳される blonden-fexa (＝feax「髪」) の前半はいかにも blond の直系古語の感を抱かせるけれども，blonden は blandan「混ぜる」の過去分詞で，「混色の」が字義どおりである。およそ人間の色彩感覚なるものは，正確に言語に定着させるには，極めて困難である。微妙な色彩のニュアンスの表現には，「混色」は物理的に最も適切ではなかろうか。上の *Beowulf* の例では，「金髪」に「白髪」が混合した状態をあらわすと見てよい。

ここで附言すべきこととして，blond と blend「混ぜる」(＜古英 blandan) とは全く無関係な語のように見えるけれども，ともに印欧基語の *bhel-「輝く；燃える」から派生していることである（前項 blank を参照)。特に blend は本来「目もくらむような輝き→混乱」という意味変化をたどった，視覚印象にかかわる語であったのである。

10) **blue** 13世紀の中英の形は bleu, blew(e) などで，古仏 bleu の借入。プロヴァンス blau, blava，古西 blavo (現在は azul に代る)，伊（方言）biavo (blu が標準）の同系語をもとに再構される共通ロマン語形は *blāvus で，ゲルマン基語 *blēwaz (＜接尾異形 *bhlē-wo-)を受入れたもの。これは古英 blǣwen, 古高独 blao (＞現 blau)，古ノルド blár (これより英方言 blae)などの諸形として再現されている。ところで，こうした語に与えられていた意味は「黒っぽい青，鉛色」のことで，ゲルマン民族の故地，北欧の空色であり，地中海的なそれとは異質である。しかし，これらのゲルマン語諸形も遠くさかのぼれば，やはり *bhel-「輝く；燃える」という印欧祖語に発していることがわかる。ちな

みに，この語根はラテン語に flāvus「黄または黄金色の」を派生させた。これによって，同じ語根にふくまれる概念でも，自然環境を異にする民族集団ごとに，かなりの改変が行われたことが注意されるであろう。

この項を結ぶに当り，上掲の印欧語根によって総括される英語の「単語家族」(word family) は，基本語彙を集合させて見ても，ざっと次のとおりとなる——black, blank, blaze, bleach, bleak, blench, blend, blind, blond, blush および flame（ラテン系）など。

11) **breach** この語は一見すれば，動詞 break に対する「正統的な」名詞形の感を人に与える。しかし外見のみでは正当な判断はできない。古英では動詞 brecan に対する名詞は bryce，そして中英では breken に対して bruche が本来のものとして存在していた。この後者の母音字 -u- は正統的には /u:/ と /i:/ との中間音として，/y:/ の音をあらわしたが，後に /i:/ と合流した。もしそれ以降そのままの発達をしたならば，*briche [braitʃ] のごとき形と音を現英にもたらしていたことであろう。ところが実態は違っていた。古仏 brèche の借入がそうした自然な流れを中断したのである。この語はひるがえって，それ自身ゲルマン語からの借用である。古高独 brecha（＜ゲルマン共通形 *brecho)に類する語形がその来源である。借入仏語 brèche [brɛ:tʃə] の開母音 /ɛ:/ は中英では ea という綴りであらわされていたが，近世英語を特徴づける「母音大推移」(Great Vowel Shift) の一環として /e:/ を経て /i:/ の音に変った——すなわち，breach [bri:tʃ] である。このように音形は変ったとしても，意味の核心は古英以来連綿と続いている，と見るべきである。

12) **bream** この（鯉に相当する）淡水魚をあらわす語は，14世紀に古仏 bre(s)me の借用にさかのぼる（＞現仏 brême)。さらに，この語はゲルマン語 *brehsmo, *brahsmo の借用であり，古高独 brahsema（＞現独 brassen)，古サ

クソン bressemo，中オランダ bressem（>現 brasem)などとして文証される。上にかかげた再構形は魚の名称であるとしても，さらに一歩進めて，その名称の起源を探ってみることは興味があるであろう。ここで引き合わせられるゲルマン共通語形は *brehwan（古高独 brehan として実証）で，意味は「きらきら光る」である。というのは，鱗をきらめかせて躍動する鯉の姿は，きわめて印象的だからであろう。動物名の起源の一つとして，受け入れるに十分値する見方であると思われる。さらに我々は進んで，「光り輝く」の意味をもつもう一つのゲルマン語基 *berhtaz を附記しなくてはならない——たとえば，古英 beorht はその再現で，bright として今に引きつがれている。仮に，'a bright bream' のような表現が許されるとすれば，頭韻法以上に，言語的にはもっと深い意味があると云うべきであろう。

13) **butt** 「突く」 来源はノルマン方言 buter で，古仏は boter（>現方言 bouter「押す，置く」)。しかしこれ自体はゲルマン語起源のものである。中オランダ botten「たたく；芽を出す」などから措定されるゲルマン語要素は *buttan で，これを名詞的に受け入れたのが共通ロマン語形 *bottōne であった。現仏の形にも今なお保存されているように，それの原義は「芽，つぼみ」である。後には比喩作用を介して，意味変化が生じ，この語は「ボタン」を指すようになった。現英 **button** は（古）仏 bouton に由来する。ここで考察を拡大してゆくと，上述のものをふくめて，たがいに形態的および意味的に対応を示すところの「単語家族」ができあがる。beat（<ゲルマン *bautan)，beetle「大槌」(<ゲルマン *bautilaz)の二つが直接の同系語として加えられよう。そして，この項のすべては印欧語基 *bhau「打つ」に還元することが可能である。

14) **crayfish** この淡水産甲殻類の一種をあらわす語は中英では crevis(se) で，古仏 crevice, crevis, crevesce（>現仏 écrevisse)をとり入れたもの。そし

て，これら自体は古高独 kreviz (>現独 krebs)に由来する。これと同系語が古英 crabba で，現英は **crab**「カニ」である。ちなみに，この語の由来は「はさみ，鉤」を意味する，たとえば古高独 krapho を同系語のモデルとして考えると，ごく自然であろう。

次に現英の語形について考えてみよう。仏語の強勢は原則的に，語末音節に置かれるために，crevís は crevísh となる。この際，語末音素 /ʃ/ はもとの /s/ よりも，「卓立または聞こえ」(prominence) が大きいということになる。この時点で，この語は庶民の言語意識で，あたかも複合語であるかのように受けとめられた。まず後半部の -vish は -fish となった。水棲動物の一種として魚類の仲間に加えられたわけで，「通俗語源解釈」がこうした耳なれない借用語に対して，立派に働いた結果である。それと同時に，前半部の cre- に対しては，音節母音の延長が行われ，書記法では cray- と改変された。これは英語の語彙目録 (lexicon) には登録されてはいないが，いかにも有りそうな形である。言語記号の体系には，音素の組合わせ方が話し手集団の意識と全く違和感がないにもかかわらず，空白のままになっている箇所がある。これを「偶然の空白」(accidental gap) と呼んでいる。特にこの場合は，通時的にも共時的にもそうなのである。形態論では「孤立形態素」(unique morpheme) と呼ばれるものである。

他方，cravis という語形は前記同様に，cravish を経て crafish となるが，有意味的複合語の体裁を整えるために crawfish が出来た。この形も上掲の形も，成立は大体近世初期である。

15) **dismay** 13世紀に古仏 *de(s)maier に由来する。同系ロマン語にはプロヴァンス desmaiar があり，これを借入したのが西 desmayar，伊 smagare である。これから帰せられるロマン語形は *dismagāre で，「力を奪う」が原義であった。構成はラテン接頭辞 dis とゲルマン語根 *mag-「力をもつ」との組

合わせである。後者は，たとえば古高独や古英 magan（>現英 may「できる，ありうる」）の形で再現されている。上記の原義がその後「ろうばいさせる」と変ったために，15世紀に登場したのが disable で，これは純粋にラテン語的である。ところで，古仏には上とは接頭辞の異なる esmaier (es-<ラテン ex-) があり，「力を外に出させる→撹乱する，興奮させる」の意味であった。現仏 émoi「動揺，興奮」はそれから由来する。しかもそれは中英に esmay のような語をもたらしていたが，現英にまで生存する力はなく廃語となった。おそらく，dismay との競合に敗れたのは，意味的には大差はないとしても，接頭辞 dis- は es- よりも，大きな表現性 (expressiveness) をもっていたからであろう。

16) **enamel** もとは動詞として，ノルマン方言 enameler, enamailler を受け入れたもの。接頭辞 en- ('in')+amail(+動詞語尾）から成り立つ。中心部の amail は古仏では esmail（>現 émail)で，より古い形としてプロヴァンス esmauz がある。一般にロマン語では，語頭に子音音素 /s/ が立ち，さらに別の子音が後続するような語構成が古来敬遠されてきた。したがって，そうした場合は母音音素 /e/ を語頭に添加することが習わしとなっている――たとえば，ラテン spīritus >仏 esprit，西 espíritu などのごとく。こうした語頭音 e- を除去した形 *smauz に対応する来源として，ゲルマン *smalt- をあげることができる。これは現実に古高独 smalz，独 schmalz「(溶かして取った）動物の脂，ラード」として存在することから，「溶けた油性物質」の原義がロマン語では塗料の一種を指すように転用されたのである。なお，古高独 smelzan (>現 schmelzen)，そして中オランダ smelten 由来の英 smelt「溶かす」も同系語としてかかげる必要があろう。なお序いでながら，上の二種類のゲルマン語は印欧語基 *mel-「やわらかい」に帰することができる（英 malt, melt, mild などとして再現)。

17) **equip** 現英「装備する，支度させる」の意味は仏 équiper からの影響によるもので，原義は「船に人員を乗り組ませる」であった。中英時代にノルマン esquiper を経て中ラテン eschipāre にさかのぼる。前項で注意したロマン語の語頭添加音 e- と動詞語尾を除去すると，*schip という中心部がえられるが，古ノルド skip「船」，同 skipa「船に人を乗り組ませる，出船の用意をする」をその来源とすることがわかる。いうまでもなく，これと同系の語は古英 scip (>現 ship)，古高独 skif (>現 schiff)，ゴート skip で，再構されうるゲルマン語は *skipam であるけれども，他の語派にはこれに対応するものは見出されない。語源辞典では起源不明の扱いをされているが，ゲルマン語派にはそれ固有の，この種の語詞はかなり多いのである。

18) **feud** 中英において古仏 fede, feide を借用したもの。その来源は古高独 fēhida (>現 fehde)，古英 fǣhþ(u)「敵意，憎しみ」などの形で再現されるところのゲルマン *faihiþō である。そしてこれ自体が *faih-「敵」+-þō「～であること，状態」という成り立ちである。その前者は古英（接頭辞つきの）gefā (>現 foe)として，後者は（現 breadth, depth などのように）-th として，それぞれ現れている。

ところで，上に掲げた古英の形はその後中期に，なぜわざわざ外来語に取って代られたのであろうか――という疑問がここで起きる。fǣhþ(u) が正常に発展したならば，中期に生じた形は feith に類するものであったであろう，という確率は高い。そうした場合，やはり同じ時期に古仏から借入当初の feid [feiθ]「信仰，信頼」とはいわゆる「同音衝突」(homophonic clash) を起すことになったであろう。この種の音声上の偶発事は，競合する複数の語のうちの何れかを「廃用」(obsolescence) に追いこむことが屢々なのである。

19) **filibuster** 「海賊；（米）議事妨害者」 現在の語形は18世紀に仏

flibustier を受入れたことによる（西 filibustero もまた同じく仏語から）。このほかに flibutor, fleebooter など異形も幾つか存在した。しかし究極的には，この語はオランダ vrijbuiter [fréibəytər] から発する——字義的には 'freebooter'（16世紀）と同じことになる。ともに「自由に略奪する者」のことである。この複合語の中間要素，オランダ buit は中期 boete に，英 boot は古英 bōt にさかのぼり，古高独 buoza（>現 busse「補償」），ゴート bōta などと共に，ゲルマン *bōtō「つぐない，利益」を再構する手だてとなる。ところで，この複合要素の boot が「略奪品」の意味に歪曲されてしまっているのは，別語 booty の影響によると説明される。ちなみに，これもロマン語を経て英語に回帰したゲルマン語詞である。

最後に boot「利益」とは同系語として，英 better と best の二語をあげておく必要があると思う。前者は古英 betera にさかのぼり，古高独 beziro（>現 besser），ゴート batiza などの対応形から再構されるゲルマン語基は *batizon——この原級の形は *bat- で，古英 bōt（>boot）として再現されるのである（ゲルマン比較級語尾における音素 /z/>/r/ への転訛は「r 音化」rhotacism と呼ばれる）。また後者 best は古英 betest（副詞は best）にさかのぼり，古高独 bezzist（>現 best），古ノルド beztr，ゴート batists などによって，ゲルマン再構形は *batist-az となる——ここにおいてもまた原級語幹 *bat- が確認されるのである（再現された同系語では *bat- はすべて bez-, bet- のように，語幹母音を /a/ から /e/ に変えている点に注意。いわゆる「ウムラウト」(umlaut) の現象である）。

20) **filter** 古仏 filtre の借用で，これは feltre の異形（>現 feutre「フェルト」）。プロヴァンス feutre，西 fieltro，伊 feltro は「フェルト」「フィルター」の二つの意味をもつ。すべて中ラテン filtrum から発し，借用源のゲルマン語は *filtiriz が措定される。ここで -iriz の部分は接尾辞 -arjaz の異形と考えられ，

動作主名詞 (agent noun) を派生させる（現英 -er はその再現)。これを除去したものは *feltaz, *feltiz である。この形に附せられる意味は「圧縮された羊毛」のことである。この場合，意味の重心は「羊毛」ではなく，「圧縮，加圧」にある。上記のゲルマン語形は，さらに印欧語基 *pel-「たたく，打つ」から発するものとして，拡大解釈されるからである（印欧 *p＝ゲルマン *f)。この語基は英語にもう一つの語をもたらした。「金敷き，かなとこ」を意味する現英 anvil である。これは an (古英 an 'on'「上で」)＋vil (＜古英 filte, fealt「たたくところ」) と分析されるのである（古英接尾 -t＝-þ で動詞を名詞化)。

21) **gain** 15世紀に古仏 gaigner「得る」(＞現 gagner)を借入したもの。より古い仏語形の gaaignier, プロヴァンス gazanhar, 西 guadañar「刈り取る」(同 ganar「得る」)，ポルト ganhar [gaɲár]，伊 guadagnare はすべて「得る」の意味で，再構ロマン語形は *gwadanjāre である。これはゲルマン *waidanjan を借用したもので，ゲルマン音素 /w/ はロマン語では /gw/ として受け入れられた。その名詞形 *waidā は古英 wāþ，古ノルド veiðr，古高独 weida の形で，すべて「狩」の意味で文証されている。

「得る」というようなごく一般的な概念は，古英 (ge)winnan＞現 win の存在によって，十分に表現できたにもかかわらず，敢えて仏語系 gain の借入が行われたのは，両者の音声的，意味的な類似性が高かったためであろう。そして古英の直系は口語的に，ロマン語系の借用語は文語的に，ニュアンスの差を使い分けできるという利点もあった。

22) **garden** 中期にノルマン仏 gardin を受け入れたもの。この方言で語頭の [g] は標準音 [ʒ] に対応するので，後者の形は jardin——この音を受け入れた伊語は giardino [dʒjardí:no]，しかしそのままの書記法を借用した西語は jardin [xarðín] と軟口蓋摩擦音に変える。共通ロマン語形は *gardīno (-īno は「指小

辞」diminutive)で，それを除いた *gardo はゲルマン *gardon をとり入れたもの。「囲い，中庭」という意味の現英 **yard** は古英 geard にさかのぼるが，語頭の g は口蓋化して半母音 [j] の音であった。しかしその他の同系言語では口蓋化は起きず，古高独 gart (>現 garten)，古ノルド garðr (これを借用したのが英 garth「中庭，構内」) などの音形と意味の共通性が文証される。他の語派で対応する語としては，ラテン hortus「庭」，ギリシア khórtos (同) があげられる (ゲルマン [g] と古典語 [h], [x] とはたがいに対応)。

上掲のものはすべて拡大して，印欧語基 *gher-「囲む」に帰することができる。したがって，古スラヴ gradŭ「域壁で囲まれたところ，町」——これよりロシア gorod [górət]「都市」，あるいは Leningrad [liningrát] などの地名に見える要素もまた，garden と同源であることがわかるのである。

23) **guard** 16世紀に (古)仏 garde (動詞は garder)の借入。プロヴァンス，西および古伊 guarda (動詞は前二者が guardar，後者が guardare)。これよりロマン語形 *warda ならびに *wardāre が再構され，ゲルマン *wardōn をその借用源とすることができる。「見張る，注意する」の原義はさらにもとの (拡張されない) 形 *war- に存在したもので，現英 ware (古)，aware, beware に生きている。究極的な印欧語基は *wer- である。現英動詞 **ward**「防ぐ，守る」は現独 warten「待つ；看護する」と対応するが，中期には形態と意味で酷似したノルマン仏語の warder によって補強された。この語は上掲の (古) 仏 garder の方言的異形である (標準仏 [g]＝ノルマン [w])。したがって種々の管理職——たとえば「管理人，知事，長官，学長」など——をあらわす語 **warden** も，もとはノルマン仏語 wardein に由来するわけで，対する標準的な古仏は g(u)arden (>現 gardien)であった。近英初期に，この後者をモデルに作られたのが英 **guardian** である (接尾辞 -ian<ラテン -iānus＝-i-＋ānus)。この項目では，少なくとも 4 種類の関連語が系統のみならず，借用の経路と時

代をそれぞれ異にしつつ，英語に存在するようになった経緯をスケッチすることができたと思う。

24) **guide** 14世紀に（古）仏 guider を借入。この形はそれまでの guier に取って代ったが，後者はすでに中英に gyen をもたらしていた。同系語として，プロヴァンス guizar，西 guiar，伊 guidare が文証され，共通ロマン語 *wīdāre を設けることができる。来源の対応するゲルマン語形としては，*wītan（＜*wīt- [*wit- の母音度延長形]）が引き合わせられる。これは，たとえば古英 wītan「見る；守る；責める」，ゴート fra|weitan（複合語）「復讐する」などとして現われている。この語根は，より包括的な印欧 *weid- に帰せられるが，「見る」という一般的な意味が与えられる。古英 wissian「示す（＜見せる），案内する」の意味は同系の現独 weisen にさえもほぼそのまま保たれているのである。

現英には古風な wise「方法，やり方」という語があるが，これも上記のものとは深い関係にある――（原義）「見る」→「外見」→「様，方法」の意味変化は，少し考えれば理解がゆく。このゲルマン語基は *wīsō が措定される。そしてこれがロマン語で *wīsa として受け入れられ，その後語頭音を gu- に変えた（古）仏 guise は13世紀の英語に借用された。それが上の wise と同義の現 **guise** である。このような関係のいわゆる「二重語」(doublet) は，すでに見たものをもふくめると，英語にはかなり多いことがわかる。

「見る」という視覚的行為は「知識」の構成に絶大な寄与をする――ということは認識論や心理学の出現のはるか以前にわかっていたことではある。英 wit「知力，理性」(＜*wit-)，wise「知えのある」(＜*wīsaz)，あるいはラテン vidēre「見る」，ギリシア idéā（＞英 idea）「見方，形相，映像，理念」，そしてヒンズー教の聖典を意味する Vēda「ヴェーダ」（サンスクリットで「知識」）に至るまで，印欧語基 *weid- の様々な派生形なのである。

25) **harbinger** 「宿舎などの準備をするための先発者」が原義で,「先駆者」の意味は16世紀に出る。中英の形 herbergere,—geour は古仏からの借用。動詞 herbergier「宿を用意する」は名詞 herberge「宿舎」から。これは古高独 heriberga「軍隊の待避所」を借用したものである。すなわち heri (または hari)「軍勢」(<ゲルマン *harjaz)+berg-「保護する」と分析される(後者については bargain の項を参照)。現英 harbinger に見える,語中に添加された -n- は messenger, passenger あるいは nightingale などに見られる剰音である。

ところで,ロマン語に借用されて英語に回帰したのは上掲の語であったのに対して,ゲルマン語直系のものもある——それが現英 **harbour** であって,今では「港」が一般化した意味であるけれども,「避難所」の原義は依然として残存する。この語は古英 herebeorg にさかのぼり,上述の古高独 heriberga とは同様な意味の複合語であった。ちなみに,「軍勢」をあらわす古英は here で,中期にフランス系の army に取って代られたけれども,動詞 hergian, herian は現英に harry「侵略する;苦しめる」を存続させていること,また古英とは同系の古ノルド herr「軍勢」+nest「供給,準備」との合成語 hernest が古仏に借用されて harneis,これが中英に借用されて現在 harness「馬具」となっていること——これら二点をつけ加えておきたい。

26) **haste** チョーサーの時代に借用されたもとの古仏形は今に至るも変らない(現仏 hâte)。その語自体もゲルマン *haistiz としてあらわされる形をとり入れたもの。しかし同系諸言語で文証される語の意味には,若干の違いがみとめられる——古英 hǣst「激しさ,斗争」(形容詞「激しい」),古高独 heisti「力強い」,ゴート haifsts「斗争」,古ノルド heifst「憎しみ,あだ打ち」などのように。しかし,この語は他の語派では対応する形がないので,起源不明のゲルマン語詞の一つとなっている。なお現独 hast「急ぎ」の来源も古仏 haste で,中オランダもしくは中低独を経由して,独語にもたらされた——これもまた語

の「逆輸入」の一例である。

27) **herald** 「使者，布告者，先駆者（シェイクスピア）」をあらわす，この語は中英 heraud, herauld をもたらした古仏 herau(l)t（>現 héraut)にさかのぼる。伊 araldo，西 heraldo など（古仏から）と共に，借用源はゲルマン *hariwald- と措定される形で，これは *harjaz「軍勢」+ *wald-「支配」と分析される（後者から古英 wealdan>現 wield「(権力を）振るう」)。ローマの歴史家タキトゥス (Cornelius Tacitus 55-117 ca.) の『年代記』(*Annales*, II, xi) には，現在のオランダにあたる地方，バターウィア (Batāvia) の族長名として，Chariovalda が記録されている。これは上記のゲルマン再構形ときわめて近似した興味ぶかい形である。しかも語頭の ch- は当時の（古代）ゲルマン語の軟口蓋摩擦音 [χ] をあらわすものと考えられる。もちろん chario「軍勢」と ualda「支配者」との合成である。これはすでに人名として，古英 Hariweald，古ノルド Haraldr（-r は古ノルド語における男性・単数・主格語尾）の形で用いられ，現英 Harold はよく知られている。このように，herald は「軍勢の統率者」という原義から「使者」へと変ったのであって，「意味の低下」現象の一例と考えてよい。

28) **heron** 「サギ科の鳥」 この論考におけるもう一つの動物名として，この語の中期形は heiroun, heroun, herne など様々ある。古仏 hairon（>現 héron)に由来し，プロヴァンス aigron，カタルーニヤ agró，伊 aghirone, airone などのロマン語とともに措定される来源のゲルマン形は *haigaron である。他方では古高独 heigaro，古ノルド hegri が文証される。ただし古英では対応形は higera であるが，「カケス，カササギ，キツツキ」と指すものが少々異なる。従って「サギ」を意味するのは hrāgra であった。これは古高独 reigaro（>現 reiher)よりも古めかしい形である。語頭に軟口蓋摩擦音 (h=[χ])

を有しているからである。これをもとに，より古い形 *hraigron が再構される。ここで/χ/に後続する/r/を落したのが，最初にあげた形である——2箇の/r/のうち一方が消失したわけで，これは「重音脱落」(haplology) と呼ばれる。鳥の鳴声を暗示させる音形である。種々の動物の中でも，とりわけ鳥類のように形態よりもむしろ，その鳴き声の方がより大きく我々の注意にのぼるものの場合，一般的に呼称はそれぞれの擬音語にもとづいている，と云えるであろう。筆者はかつて，『擬音語と鳥の名称』と題する語源考において，そうした考え方を例証する機会があった（京大「英文学評論」第44号，昭和55年)。

さて上述のゲルマン語基は拡大して，印欧語基 *ker- によって総括することができる。種々な自然の音声をあらわす語根である。現英に行われる，たとえば，rook, raven, crane, crow や，語頭に強調的な歯擦音を立てた shrike などの鳥名もまた，それに基いて種々の構成法をとっているのである。

29) **lodge** 中英の形は log(g)e で，（古）仏 loge「小屋，あずまや，劇場のボックス（現)」を借用したもの。ポルト loja，伊 loggia，プロヴァンス lotja などをも派出させた中ラテン形は laubia, lobia であった。これは「修道院の回廊」のことであって，現英 **lobby**「ロビー」はそれから由来する。ちなみに，ここでラテン(母音間の)/b/ がロマン諸語で /ʒ/, /dʒ/ として転訛するもう一例は，ラテン plebium＞古仏 plege（下掲の項目32を参照のこと)。

さて上のラテン laubia 自体はゲルマン *laubja の借用である。古高独 loup-pea, louba「かくれ家，小屋」，中高独 loube「ポーチ，バルコニー」，現独 laube「あずまや」などが文証される。再構形に附せられる原義としては「樹皮(こけら)で作った屋根（→小屋)」——つまり「樹皮をはぎとる」という行為自体に意味の重心がある——を想定する説もあるが，決定的なものではない。

30) **marshal** 13～14世紀に借入の源は古仏 mareschal（＞現 maréchal)で，

他のロマン各語にも対応形が存在した——プロヴァンス manescalcs，伊 maniscalco「蹄鉄職人」,(同)maresciallo「將軍；士官」,西 mariscal「司令官」（あとの二つは仏語から）のように。これらはすべてゲルマン *marhaskalkaz をその源とする。つまり *marhaz「馬」+*skalkaz「従者」（→「馬丁」）という合成である。記録されたゲルマン諸形として，古高独 marahscalh>現独 marschall「馬丁」，また古来そうした職をあらわすことのなかった古英では，複合語は見られないが，個別的に mearh「馬」,scealc「従者」の語は存在した。ちなみに古英 mearh は現在 mare「雌馬」として存続している（<語基 *markos)。また scealc は古高独 scalc（>現 schalk），ゴート skalks とともに文証されるが，印欧の他語派では対応するものはない。

最初は「馬の世話をする従者」の地位から，最後は軍の高官（たとえば「元帥」）のそれを意味するようになったこの語は，「意味の向上」の典型的な一例でもある。古代から中世に移行するにつれて，騎兵隊の軍事的重要性が急速に高まったという見方も大変参考になると思う。他方では，馬の重要性に関係ある官職は後期ラテンで comes stabulī「馬屋の伯爵」と云った。この特定の称号は一般化して，治安関係の官職をあらわすようになった——英 constable はもと古仏などのロマン語で，上記のラテン2語が接着して，一語に単純化されたものから由来する。

31) **mason** 中期にノルマン仏 machun, mascun, masoun が借用されたが，古仏は masson（現 maçon)である。これはプロヴァンス masó，ポルト maçãoの諸形とともに，*makiōn- のごときロマン語形を措定する。これより借用源としてゲルマン *makōn「こしらえる」が引き合わせられる。この場合，古高独 stein|mezzo（>現独 steinmetz「石工」）のような複合形の後半部を来源と見る向きもある——たとえば古英 mattuc（>現英 mattock「つるはし」: -uc, -ock は指小接尾辞),露 motyga「くわ」,リトアニア matikas（同)などと音形，

意味の点で対応するものとしてである。しかしこの試みは音韻論的にかなりの無理がある——/k/ と /t/ とは対応を示さないからである。

したがって，我々は道具の観念よりはむしろ，造形のそれを「石工」の意味の重心にすえる方が，ずっと自然だと考える。なお上掲ゲルマン語基は古英 macian（>現 make「作る」），古高独 mahhōn（>現 machen）などから再構されたものであり，さらにこれは印欧語基 *mag-「形づくる」によって総括される——ギリシア massein「こねる，練りまぜる」，同 mágma「（地質）マグマ：（-ma は出来上った結果を示す接尾）」もそれに基いて構成されているのである。

32) **pledge** チョーサーに見えるのは plege で，古仏 plege（>現 pleige）から。ラテン plebium「責任，保証」（動詞は plebire「保証する」）にさかのぼる（ラテン /-b-/ >ロマン /-ʒ-/ に注意）。さらに，このラテン語はゲルマン諸語に文証されるような古英 plēon「身を危険にさらす，冒険する」（同，名詞 pleoh > 現英 plight「苦境」），あるいは古高独 phliht「冒険」>現独 pflicht「義務」をその借用源としている可能性が大きい。これらより措定される形は *plegan「危険をおかす」である。「誓約，抵当」なるものは，常に何らかの危険を賭することが，その前提となっているからである。

*plegan に帰せられるもう一つの意味は，「働かせる，行使する」に類するものである。古英動詞 plegan, plegian には「忙しく従事する，動きまわる，たわむれる」の意味があった。現英 play はこの系統をひくものである。

33) **random** 中英は randoun で「激しさ，性急」を意味した。'in a randoun'「激しくふるまって」，'at randoun'「力のなすがままに」のような成句で見られる語であって，中世の鷹狩りや騎士の馬上試合に関する言いまわし方であった。特に後者の句は「猛烈な速さで」→「盲進して」→「でたらめに」という具合に意味が変った。

さて，こうした句は古仏 'à (または de) randon' の直訳である。この句はさらに他のロマン語にも採用されて，西 de rondon，ポルト de rondão「急激に」となったが，今では使われない。ところで，この名詞は動詞 randir「はげしく走る，突進する」から発したもので，さらにゲルマン *rant「走行」にその源をもつとされる。ただし，これは往時のフランク方言形であって，文証されてはいないが，「走る」の意味では古英および古高独 rinnan（>現それぞれ run と rennen)，古ノルド rinna，ゴート rinnan は周知の動詞である（ついでに上掲 *rant の -t 接尾は，英 drive → drift, draw → draught のように動詞を名詞にするもの)。古仏 randir の来源をゲルマン *rand「縁，へり→（比喩的）桶」とする説もあるが，意味的な関連性という点で承服できるものではない。

34) **saloon** 18世紀に仏語 salon から。今ではこの仏語と共に，種々の意味で用いられる。もとは伊 salone に由来するが，ここで -one は拡大を意味する接尾辞である（上掲 balcony の項を参照)。西 salón，ポルト salão もそれを借用した形である。したがって，もとの形は sala「広間，客間」で，その他のロマン語にも借入された——西 sala，古仏 sale(>現 salle)。起源はゲルマン *salaz, *saliz としてあらわされる古英 sæl，古高独 sal（>現 saal)，古ノルド salr および異形の古英 sele，古高独 sali, seli などである（ただし *saliz は語幹母音 /a/ がウムラウトを起す以前の形として再構)。すべて「広間，ホール」を意味する。

上記のゲルマン形と対応するものとしては，ラテン solum「土地，床(ゆか)」をあげることができよう。これをふくめると，印欧語基 *sel-「人間の住居」によって，すべて総括されうるということになる。

35) **scale** 「うろこ」 14世紀に古仏 escale から（>現 écale「殻，(豆の)さや」，écaille「うろこ」)。そして来源はゲルマン *skalō が措定される。そし

てその異形 *skælō によってあらわされるのが，古英 scealu「貝殻，（その形状の）盃，皿」（>現 shell），古高独 scala「さや，貝殻」（>現 schale「うつわ」）などである。要するに根源的な意味は「削りとられた薄い片」に類するものである。ちなみに，上記の再構異形にもとづいている古ノルド skál を直接に受入れたのが現英 scale「てんびん皿」となった。ノルド語の音韻的特徴の一つとして，/s/ に後続する /k/ は口蓋化されずにとどまることである（他方古英では語幹母音 /a/ に「割れ」(fracture) が生じて /ea/ となったために，直前の /k/ は /ç/ となり，/sç-/ から /ʃ/ となった）。

ここで上記のものと同源の現英形を列記するならば，scalp「頭皮」，scall「フケ」，skoal「祝盃」（北欧語系: 古ノルド skál），shale「頁（けつ）岩，泥板岩）」，shield「盾（板）」，あるいはラテン sculpture「彫刻」（scalpere の異形 sculpere「削る，刻む」から）などである。すべてを総括する印欧語基は *skel-「削る，切る」とその異形である。

36) **scorn** 12世紀に出現する形 scornen の来源は古仏 escharnir, eschernir であるから，語頭音 (e-) 脱落は例によって行われていることがわかる。プロヴァンス escarnir，西，ポルト escarnecer，伊 schernire などとして再現されているロマン基語は *escarnīre で，来源と見なされるのはゲルマン *skarnjan, *skernjan。これは古高独 scernōn「嘲笑する」（名詞 scern），古サクソン skern「嘲笑」として現われている。ロマン語形の起源を *excornāre「つの (cornū) を取る」→「はずかしめる」とする解釈は，伊 scornare「あざける」，仏（古）écorner「つのを折る」にもとづいているので，これも一応は首肯しうる。上記のゲルマン語が借用された時点で，音形からする意味が話し手になじまなかったとするならば，より語義の透明な，しかも音形の酷似した土着の語にすり代える，という確率はきわめて高かったであろう。これは現実に言語史においてよく見出される事例であって，我々はそれを「語の補強」と呼んで

もよいと思う。

37) **screen** 古仏 escran (>現 écran)のノルマン方言形 escren を語頭音脱落の形で借入したもの。「防護板，ついたて」が第一義である。来源は古高独 scerm (>現 schirm「ついたて，傘」)，中オランダ scherm「防護板」などとして現れているゲルマン *skerm- が考えられる。現伊 schermo「防具，スクリーン」はこうした形を直接受け入れた結果である。他方，古仏 escran は形態的にかなり歪曲している——というのは，まずもとの子音結合群 (consonant cluster) を避けるために語頭に /e-/ をたて，次に /-er-/>/-re-/ (または /-ra-/) のように「音位転換」(metathesis) をおこなっているからである。

上掲のゲルマン語基「防ぐ」に帰せられるもう一つの語として英 **skirmish** がある。「小ぜり合い」の意味はもちろん「双方防戦すること」から出ている。語基 *skerm- が古仏に eskirmir あるいは escrimir (音位転換形) として借入され，その動詞の現在活用語尾 -iss- が -sh として中英に持ちこまれた——これが skirmish の前歴である。**scrimmage**「つかみ合い，乱斗」の古形は scrimish であるから，skirmish に音位転換の起きた異形であることは，すぐにわかるであろう。

38) **screw** 古仏 escroue (女性名詞) の語頭音省略の形を借入 (現仏は écrou「ナット」男性名詞)。来源は中高独 schrūbe (>現 schraube「ねじ」)，中オランダ schrūve >現 schroef (これより西ゲルマン語基 *scrūva)とされているが，究極的にはラテン scrōfa「(雌) 豚」を，ゲルマン諸語が借入したものだという説にならうことにする。「ネジ」を「豚」にたとえるには，さほどの想像力は要らないと思われる。同じ比喩のはたらきは，西 puerca「(雌) 豚」(<ラテン porca)が「ネジ」の意味で用いられていることによっても例証される。ちなみに英 pig は「金属の鋳型」，horse は「鋸引き台」，crane は「起

重機」というように，比喩の転義で用いられる動物名はかなりある。ちなみに，ラテン scrōfa「豚」の原義は「(汚れで表皮が固まって) ざらざらした」ということで，これに対応する古英は hrēof「ざらざらの」，sceorf「皮膚病の一種」(s- は強意の前接音)，そして後者からの現英 scurf「ふけ，あか」などがあげられる。

39) **seize** 13世紀に古仏 seisir (>現 saisir)の語幹部を借用したもの。プロヴァンス sazir はイベリア半島で西，ポルト asir「つかむ」の形をもたらした。ここでは語頭子音がしばしば落される傾向がある(たとえば，ラテン facere「為す」>西 hacer [aθér] のように)。ところで，文証されてはいないが，ガリア地方のラテン *sacīre にこれらは発するとされ，最終的にはゲルマン *sakjan「要求する，所有する」に行き着くことになる。これと語幹母音を異にする *sōkjan に帰せられるのが古英 sæcan, sēcan で，現英 seek「求める」となっている。また母音度低減の *səg- から派生した名詞 *sakō「求めること」に帰するものとして，古英 sacu「訴訟」があった。現英 sake「目的，ため」は原義をほとんど失なって，慣用句の中で生きている。このほかに forsake, ransack (ノルド語系) のごとき複合語にも，原義をとどめつつ同種の派生形は保たれている。広く総括的な印欧語基は *sāg-「求める」とされ，ラテン sāgīre「鋭く見抜く」(<「知ろうと求める」)，sagāx「鋭い心の」(>英 sagacious)もそれによって説明がつく。

40) **shop** 「店」の意味では13世紀に，「仕事場」のそれでは15世紀に，ノルマン，古仏 eschoppe が語頭音を省いて借入されたもの (現仏 échoppe「屋台の店，露店」) と見られる。ところで，古英には「小屋」という意味の sceoppa という語があった。またその異形として scipen (>方言 shippen)「牛小屋」もあった。したがって，現英 shop が前者からの順調な発達形と見る点につい

ては，何の異論もないのであるが，仏語の姿で回帰した下記のようなゲルマン系の語によって，その用法上の補強ないしは改変を受けた，とするのが最も妥当な考え方ではなかろうか。

古仏の借用源と目されるのは中低独 schoppen, schuppen（＝現独「小屋，物置」）である。同系語は古高独 scopf「ポーチ，入口の間」（＞現独方言 schopf「差し掛け小屋，納屋」），および上掲の古英の２つの形である。

41) **span** 「親指と小指とを張った長さ（約９インチ）」をあらわすこの語の初出は13世紀で，れっきとした古英の語詞 spann である。これと同系のものとして，中オランダ spanne，古高独 spanna（＞現 spanne），古ノルド spǫnn があり，すべて上記と同じ意味である。

さて，ノルマン人の英国征服 (The Norman Conquest, 1066年）以降の中期英語にかかった（ノルマン）仏語の圧力が，いか程のものであったかを少しでも考えるとき，一般に語のたどった歴史的過程で，そうした外圧の有無を吟味する必要があるように思われる。このようにして，音形と意味で相似の古仏 espan（＞現 empan）が注意される。これは上に記したゲルマン語諸形のうちの，いずれかを借用した中ラテン語形から発することが記録されているから，古英 spann は時間的，距離的に大きな迂回を経た古仏形によって，補強をうけたということになるであろう。序いでに，この語は「張る」という原義が与えられる語基 *spen- に帰せられるので，英 spin「紡ぐ」（＜古英 spinnan）も，構成上の語幹母音が異なるのみで，同類語と見なされる。

42) **spell** 「（語の）文字をつづる，判読する」という意味で，古仏 espeller（＞現 épeler）が語頭音を落して定着したのは13～15世紀の間であった。そのより古い形は espeldre [/-d-/ は /l/ と /r/ の間に生じた「わたり音」(glide)]で，来源はゲルマン *spellōn である。

さて，この外来語がおそらく容易に，英語の風土に定着したであろうと考えられる根拠として，古英以来 spell という語があった。意味は「物語，話，報せ」がその原義であって，「まじない」はチョーサーにおける第二義である。また同系のゲルマン語詞では古高独 spel からゴート spill に至るまで種々揃っている（語基 *spellam)。

他方，これに対する動詞「語る，話す，報じる」も古英 spellian，古高独 spellōn，ゴート spillōn のように文証され，語基は上記の *spellōn である。

こうして，文字が広く社会に普及するにつれて，文字を綴る行為はますます重要になり，そこへ都合よくほぼ同形の外来語が出現して，そうした意味の附加を実現した，ということになる。この種の現象は「意味の借用」(semantic borrowing) と呼ばれ，言語史ではしばしば観察されるものである。

43) **spy** 13世紀に古仏名詞 espie が語頭音を落して借用されたもの。それと同系のものにプロヴァンス，カタルーニア espia，伊 spia がある。他方，動詞形は espier で14世紀に **espy** をもたらした。これはその後，語頭音を省いて，名詞と同形の spy となった。これが「スパイを働く，見張る」を意味するのに対し，espy の方は「認める，見つける」の意で，文語的に用いられる。こうした二重語 (doublet) が同居しうる条件は，ニュアンスに違いがあるということである。

さて，古仏がその来源としたのは，中低独 spēen，中オランダ spien，古高独 spehōn (＞現独 spähen「見張る，見つける」)，古ノルド speja などとして再現されるゲルマン *speh- である。この語基は印欧 *spek- の形に総括されるものであって，「見る」を意味する。ラテン specere「見る」をはじめとして，specimen, spectacle, speculate, inspect, respect, suspect などの見なれた現英用語のラテン語来源において，あるいは *spek-＞*skep- の音位転換形から造成されたギリシア skeptikós 由来の sceptic，またその母音度の異なる構成法

のギリシア skopós 由来の scope などにおいて，種々の現われ方を見るのである。

44) **stuff** 中期英語後代に古仏 estoffe（>現 étoffe)が語頭音省略の形で借入されたもの。カタルーニア，西，ポルト estofar「詰めものをする」とは同系の動詞 estoffer の語幹名詞である。そしてこれはゲルマン *stopfōn のロマン語化であることがわかる——独 stopfen「詰める」, 古英 for|stoppian「閉ざす」, 現 **stop**「止める，止まる<詰める，ふさぐ」などの形と意味で文証される。しかし来源はここで「止まった」ことにはならない。これらはさらにさかのぼって，後期ラテン stuppāre「詰めものをする」< stuppa「麻くず；コルク（後期)」にゆき着くのである（このラテン語自体もギリシア stúpē「麻くず」の借用)。原義の「麻くず」は時間と空間の媒介によって，現英 stuff のもつ多種な意味を獲得するようになった。「意味の拡大」の事例としても注目に値するであろう。

45) **towel** 中英の諸形は towaile, towelle, touel であり，古仏 toail(l) e を来源とする（現・古風 touaille)。西 toalla「タオル」，伊 tovaglia「食卓布」はプロヴァンス toalha から来たもの。このようなロマン語形の源とされるのは古ノルド þvegill，古高独 dwahila（>現 zwehle)，中および現オランダ dweil——すべて「タオル，食卓布」——などで，祖形は *thwahljō と設定される。他方，意味上の差異はあるが，上記のものと形態的な対応を示すのが古英 þwēal「洗うこと，沐浴」, 古高独 dwahal「沐浴」, ゴート þwahl（同)，古ノルド þváll「石けん」という語である。ここに引用したすべての語に見られる語尾部 {-l-} は古英 -el，古高独 -il, -la，古ノルド -al, -ill, -ull などとして現われる動詞幹に加えられる名詞接尾である（<印欧 *-(i)lo-, *-(e)la など)。

したがって，これらの語の基底をなす概念として，「洗う」を意味するゲル

う——例えば，opus bellum「美しい作品」，さらに equi bellī に至っては「戦いの馬（単数属格）」と「美しき馬（複数主格）」との判別は状況によるしかない。それゆえ，「戦い」をあらわす語は外来語になった。しかも，その要求を満たすには，ゲルマン諸語に不足はなかった。例えば，古英だけでも「戦い」を意味するのに gūþ, heaþo, hild, wīg など種々の語が存在したのである。

49) **warble** 「鳥のさえずり」をあらわすこの語は14世紀に，古ノルマン仏 werble がそのままの形で入ったもの。今まで見てきたように，それに対する古仏標準形は当然のことながら *guerble である筈だが，文証されていない。この来源になりうるのは古高独 wirbil「旋風」(＞中高独および現独 wirbel「渦，つむじ風，鳥の連続的なさえずり」)，(中)オランダ wervel|wind「つむじ風」，古ノルド hvirfill「円，頭の先」，古英 hwyrfel（同前）などとして再現されるゲルマン *hwerbilaz である。現英 whirl「回転（する）」は13世紀に，上記の古ノルド形を借用して，古英の形と融合させたものである。このようにして，物理的あるいは少なくとも視覚的な回転動作が，聴覚的な震音をあらわすようになった経緯は興味ぶかい。こうした意味の比喩的な推移を説明しうる一つの普遍的因子 (semantic universal) として，我々は「共感覚」(synæsthesia) と呼ばれる心理現象をひきあわせることができる。

50) **warrant** 「保護，保証」の義では13世紀に，「証明書」として15世紀に，そして「正当な理由」の意味では16世紀に借入されたこの語の源はノルマン仏 warant で，対する標準古仏は guarant（＞現 garant「保証（人）」)。そこからプロヴァンス garens，西 garante，伊 guarento（古）「保証人」などが生じた。あるいは中ラテン warens, warandus から生じたとも考えられる。何れにせよ，これは本来のロマン語ではなくて，古高独 werenti「保護または保証」(動詞 gi|werēn＞現独 gewähren)，またはその（古フランク方言的）異形が借用源

であることは疑ない。なお，この古高独形は動詞 wer(r)en「守る」の現在分詞である。すると次にはこの動詞語幹の源を求めなくてはならない。広く印欧語基として措定されるのは *wer-「守る，おおう」である。この語幹母音 -e- が -o- に交替した（Ō（オー）母音階梯と呼ばれる）*wor- は，さらにゲルマン祖語の段階で母音を -a- に変えて *war- となり，動詞接尾 -nōn がついた *warnon は古英に warnian を生じた。その現英形 **warn**「警告する」の原義は遠く「守る」にさかのぼる。

次に動詞 warrant も上述の名詞とほぼ平行して，16世紀までに定着した。源は古仏 warantir（北部方言的）で，他方ではその過去分詞転用の女性名詞 warantie から **warranty**「(品質などの）保証（書)」が英語にもたらされた。ところで，この項のはじめにも記したように，この warantie に対する標準的な形は garantie となる(現仏も同形)。英 **guaranty** [gǽrənti]「《法》保証(人)」はそこから来たものである。そして，同じく最初にかかげた西 garante [garánte] が近代に仏語に入って garanté となり，18世紀に英語に登場したのは **guarantee** [gærəntí:]「保証（する)」であって，主として商業上の意味をふくんでいる。

この項の終りに，上掲の語以外に古期仏語の同じ動詞から由来して，現英で用いられているものを簡略にかかげてみると，garage「車庫，ガレージ」（<garer (古)「保護する」)，garret「見張塔（古)→屋根裏部屋」(<古仏 garir「守る」)，garrison「守備隊」(同前）などである。ここに記した関連語彙はすべてゲルマン語起源なのである。

マン *thwahan を措定することができる。すなわち，古英 þwēan，古サクソン thwahan，古高独 dwahan，古ノルド þvá，ゴート þwahan——すべて「洗う」——として再現されている語である。

46) **wafer** 中英 wafre は古ノルマン仏 waufre を受け入れたもの。標準的な（古）仏は gaufre である。'guard'（23項）においてすでに述べたように，ノルマン方言 /w/ は標準音 /g/ に対応するので，それはこの場合はにも適用される。ところで，現英には goffer, gauffer「装飾用のひだ，縮み；（布などに）ひだをつける」という語があるが，これは上掲仏語 gaufre の動詞 gaufrer（およびその名詞転用）が借入されたものである。ここで問題になるのは，「ウェーファー」なる名称の菓子においても特徴的な形状のことである——「焼き網模様のついている，格子形の刻み目のついている」ことである。ノルマン仏語が借用したのは中低独 wāfel（現オランダ wafel）であって，そのような焼き方をした菓子を意味する。ちなみに，この語は19世紀に米語にもたらされて，**waffle**「ワッフル」となっている。

さて，現仏 gaufre には「蜂の巣（の形）」という意味が今なお保存されているところから，借用源のゲルマン語詞の原義がそれであったのではないかと推論される。「蜂の巣」をあらわす語として，古高独 wabo（>現独 wabe）がある（現オランダ語ではこれと同系語は廃用に帰した）。この語は「織って作る」を意味する動詞と関係がある——古英 wefan（>現 weave），（中）低独，オランダ weven，古高独 weban（>現 weben）などとして文証されているもので，印欧語基 *webh-, *wobh- に帰せられる。wasp, web などもそれに基いていることを附け加えておこう。

47) **wage** 中期英語（以降）に古ノルマン仏 wage を借入したもの。前項の場合と同様，対応する標準の古仏は guage（>現 gage「抵当，保証」）となる。

これはそのまま再度，中英期に借用され，仏語と同じ意味の **gage** として現在に至っている。その起源とされるのは，すべて「抵当」を意味する古英 wedd（>現 wed「結婚させる，する」: 動詞 weddian から），古高独 wetti（>現 wette「賭」），ゴート wadi などである（<ゲルマン *wadjam「保証」）。中ラテン vadium もまた，これらのうちの何れかを借用した形である。

wage の動詞用法として「（戦いを）行なう」があるが，これは gage の特殊な意味「挑戦のしるしに地面に投げつける手袋，帽子など→挑戦」が参入した結果であろう。この二語のような，いわゆる二重語は意味の面でも，ともすれば相通を招くことはよく知られている。なお接頭辞つきの **engage** も古仏 engager から由来して，「保証つきで引きうける」が，もちろんその原義であった。

48) **war** werre という形が13～15世紀にかけて最も標準的に中英でみとめられる形。他に種々の異形 warr(e), wyrre, weorre などがある。古ノルマン仏 werre が借用源で，これは例によって（古）仏 guerre に対応する。その他のロマン語ではすべて guerra として通用していて，ゲルマン語に起源を有する（西 guerrilla「ゲリラ」:「小戦争」の意味）すなわち古高独 werra「混乱，不和，戦い」（>現独 wirre），あるいは動詞 werran「混乱させる」（>現独 wirren）などがそれに当る。ゲルマン語基は *wers-「もつれさせる」で，古英には wyrsa, wiersa「より悪い」（<*wersizon: この接尾幹 -iz- は後に「r 音化」(rhotacism) によって -er- と変化），そして wyrresta, wierresta「もっとも悪い」（<*wersistaz: -istaz 最上級接尾）の二語を造出し，worse と worst とがそれらをひきつぐ形である。

ロマン語がわざわざ，「戦い」を意味するゲルマン語系の語を借入するに至った理由として考えられることは，その祖語のラテン語で bellum「戦い」（中性名詞）が形容詞 bellus「美しい」と同音になりうる場合があったことであろ

# 参 照 書 目

Auerbach, Erich: *Introduction to Romance Languages and Literature* (New York, 1961)

Bloch, Oscar et Wartburg, Walter von: *Dictionnaire étymologique de la langue française* (Paris, 1964)

Buck, Carl D.: *A Dictionary of Selected Synonyms in the Principal Indo-European Languages* (2nd ed.) (Chicago, 1965)

Corominas, Joan: *Breve Diccionario Etimológico de la Lengua Castellana* (3a ed.) (Madrid, 1973)

Darmesteter, Arsène: *La vie des mots* (réimpr.) (Paris, 1950)

Dauzat, Albert: *La géographie linguistique* (Paris, 1944)

Dauzat, A., Dubois, J. et Mitterand, H.: *Nouveau dictionnaire étymologique et historique* (2e impr.) (Paris, 1969)

De Silva, Guido G.: *Elsevier's Concise Spanish Etymological Dictionary* (Amsterdam, 1985)

De Vries, Jan: *Altnordisches Etymologisches Wörterbuch* (Leiden, 1962)

Entwistle, W. J.: *The Spanish Language* (repr.) (London, 1974)

Ernout, A. et Meillet, A.: *Dictionnaire étymologique de la langue latine* (Paris, 1959)

Falk, H. S. und Torp, A.: *Norwegisch-Dänisches Etymologisches Wörterbuch* (2te Aufl.) (Oslo u. Bergen, 1960)

Gaya, Samuel G.: *Nociones de Gramática Histórica Española* (5a ed.) (Barcelona, 1966)

Greimas, A. J.: *Dictionnaire de l'ancien français (jusqu'au milieu du XIVe siècle)* (Paris, 1968)

Hall, J. R. C. and Meritt, H. D.: *A Concise Anglo-Saxon Dictionary* (4th ed.) (Cambridge, 1960)

Haller, J. und Dannenbauer, H.: *Der Eintritt der Germanen in die Geschichte* (Berlin, 1957)

Hoad, T. F.: *The Concise Oxford Dictionary of English Etymology* (Oxford, 1986)

Hock, Hans H.: *Principles of Historical Linguistics* (Berlin, 1986)

Holthausen, Ferdinand: *Altenglisches Etymologisches Wörterbuch* (2te Aufl.) (Heidelberg, 1963)

ditto: *Gotisches Etymologisches Wörterbuch* (Heidelberg, 1934)

Klein, Ernst: *Comprehensive Etymological Dictionary of the English Language* (Amsterdam, 1971)

Kluge, F. und Mitzka, W.: *Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache* (20te Aufl.) (Berlin, 1967)

Krahe, H. und Meid, W.: *Germanische Sprachwissenschaft* : Bd. 2: *Formenlehre*, Bd. 3: *Wortbildungslehre* (Berlin, 1967)

Lausberg, Heinrich: *Romanische Sprachwissenschaft* (in 2 Bde.) (Berlin, 1956)

Lehmann, Winfred P.: *A Gothic Etymological Dictionary* (Leiden, 1986)

Onions, C. T. et al.: *The Oxford Dictionary of English Etymology* (repr.) (Oxford, 1979)

Pei, Mario: *The Story of Latin and the Romance Languages* (New York, 1976)

Pidal, R. M.: *Manual de Gramática Histórica Española* (Madrid, 1973)

Pokorny, Julius: *Indogermanisches Etymologisches Wörterbuch*, Bd. 1 (Berlin u. München, 1959)

Pope, M. K.: *From Latin to Modern French* (repr.) (Manchester, 1966)

Posner, Rebecca: *The Romance Languages* (New York, 1966)

Prokosch, Edward: *A Comparative Germanic Grammar* (Baltimore, 1938)

Tucker, T. G.: *A Concise Etymological Dictionary of Latin* (Hildesheim, 1973)

Wartburg, Walter v.: *Évolution et structure de la langue française* (4e éd.) (Berne, 1950)

Watkins, Calvert: *The American Heritage Dictionary of Indo-European Roots* (Boston, 1985)

Weekley, Ernst: *An Etymological Dictionary of Modern English* (in 2 vols.) (New York, 1967)